

## 編集後記

学会誌として、初めて特集号を発刊することにした。本来ならば、研究論文に加えて、社会に発信する「原子力発電政策」に関する提言も収録する予定であったが、学会内の議論を集約するのに時間がかかり、次号に託する結果になってしまった。

しかし、この討議を通じて、あらためて「総合知」とは何か、あるいは提言がよって立つべき「基本的な思想」は何か、提言策定公表に必須な「制度あるいは手続き」とは何かなどについて、まだ漠然としてはいるが、貴重なヒントが得られたものとする。

何れにしても、提言活動を学会の主要な研究活動の一環としてとらえることが、知の研究の質を高めるとともに価値あるものにするに信ずるものであり、社会との交流こそが我々が持っているであろう「知の限界」を広げる結果になるものとする。

一方、残念ながら、原子力発電こそが低廉かつ固有のエネルギーという認識が持たなくなる一方で、第4次産業革命が我が国のみならず世界中で、また産業革命が産業に留まらず社会全般に、いまだかつて経験したことのない変動をもたらしつつある。

にもかかわらず、相も変わらず、企業内の単なる「IoTによる生産性向上」と捉え、国の生き残りを賭けた国際的な競争で、言うならば海外市場の争奪戦でもあるという意識に欠けているように思われる。

しかも、原発事故による莫大な賠償・廃炉費用が、国の財政破綻を助長するだけでなく、結果的に第4次産業革命の推進に必要な資金も圧迫している筈である。すなわち、我が国だけが、産業革命の果実の恩恵にもあずかれなくなるかもしれないのである。

そして、産業革命のもう一つの顔、すなわち膨大なデータ処理からもたらされる人工知能の進歩は我々の生活にも大いに影響を与える可能性が高い。少なくとも、少なくともある種の職業が消滅するのは過去の例からも容易に予測される。

また、生身の脳による知恵と人工知能の差は、情動の有無であるといわれている。どんなに事項知能が発達しても、この差は永遠に埋まらないというのである。しかし、情動ということになると、現に西洋と東洋、少なくとも我々との間にも差があるのではなかろうか。

少なくとも、脳の働きについては、全体の機能としては同じであったとしても、右脳と左脳の分担には差があるといわれている。消費社会のビッグデータの分析から、日本人と外国人の間について、今までとは異なる差異が認められるのではなかろうか。

そうすると、西洋思想と日本思想との根源的な差異についても新たな知見が得られ、研究会でも何回となく繰り返されてきた、和魂洋才というような明治以来の伝説的かつ古典的な議論にも、新たな展開が起こることに期待できるのではなかろうか。

何れにしても、そのような気持ちがあるかぎり、総合知が出張るべき分野、または研究テーマあるいは提言テーマに事欠かない状況になるのではなかろうか。すなわち、我々の学会のレーゾンデートルあるいは存在価値をあらわにする機会の到来を期待できるのではなかろうか。

小松昭英

